

13. 学習能力の多様性と日本語習得について — 認知心理学からの一考察 —

西島美智子
ニューブランズウィック大学

Abstract:

The diversity of Learners' Intelligences and the Acquisition of Japanese as a Foreign Language

In the acquisition of Japanese as a foreign language, learners show individual differences. No matter what national/cultural background they have, or what first/second languages they speak, they show different strengths and needs in learning. This research focuses on Howard Gardner's theory of multiple intelligences which examines the individual differences of students in terms of strengths and abilities. The research explores the use of the theory in three classes of Japanese as a foreign language. The purpose of the research is to seek a better approach to the difficulties that students encounter. Data for this research was collected through questionnaires, observations, and interviews in Japanese introductory classes at the University of New Brunswick. In the process of collecting data, the students participated by learning their strengths and needs, and finding strategies to meet their needs. The teacher sought different approaches and activities for the students to use their strengths. Explorations and findings of the data show different aspects of validity of the methodology. The research shows the importance of students learning their preferred approaches and activities utilizing these approaches to reinforce their needs.

1. はじめに

日本語教育に携わっている教師として、いかにより良い教師であるかは長年の一課題であろう。何を教えるか、そしてそれをどう教えるか、工夫研究は尽きない。

一方、いかにたくさんの実践経験を積み、優れた教授内容と教授方法をもって一定の学習環境で教えても、学習者の習得力には個人差が出る。なぜだろう。その内的要因として、年齢、性別、文化的言語的背景、興味度、目的、そしていわゆる言語のセンスなどがあげられるであろう。しかし、2言語以上を獲得した人が外国語の習得に常に秀でた力を発揮するであろうか。アジア系の学習者はヨーロッパ言語系の学習者に比べて常に日本語習得に優位をあらわすであろうか。また興味度や目的は学習を継続する大切な推進力ではあるものの、果たしてこれらが学習達成度のバロメーターになるであろうか。こうした疑問を抱きながらクラスのなかで学習者の観察を行ってみると、学習活動にたいしてどんな学習者もそれぞれに違った傾向や学習スタイル、そして能力をみせることに気づく。たとえばある学習者は発音の違いに敏感でテープリスニングによる学習に強い。ある学習者は文字の習得に優れ、自らすすんでライティングの学習をおこなう。また、ある学習者はロールプレイなどによる対話練習を得意とする。つまりこれは、どんな学習者にも語学をよりよく習得する潜在力があり、それぞれに違っているということではないだろうか。こうした違いを前述の要因とは別に学習者のもつ能力の多様性と考えると、その能力を認知し活用することによって、より良い学習者を育てることができないだろうか。

本稿ではこの課題をテーマに、ハーバード大学心理学者であるHoward GardnerのMultiple Intelligences (以下MI)の理論を導入し、日本語クラスでこの理論に基づく活動を実践したデータを用いて、その効用と問題点を検討する。どんなアプローチが個々の学習者の得意を助長できるか、どのように学習者の困難を克服する手助けができるか、またさまざまな不得意に対応する攻略方法はあるだろうかなどを探り日本語習得へのより良いアプローチおよび学習方法を獲得する可能性を提案する。

2. ガードナーの理論とは

まず、IQ(Intelligence Quotient)テストの話から始めよう。今世紀の初め、フランスのパリで初等教育において児童がどのくらいの学習能力を発揮し、良い成績を達成できるかを測るためのテストが考案された。このテストはまもなく知能を測るための標準テストとして国内外に知られていった。つまり、知能とよばれるものが学校教育における学習能力を左右し、それがIQのスコアとして測定可能であるという考えが、広く受け入れられたわけだ。IQテストは次第に異なった年齢や文化設定に適應する改訂版がさまざまに開発され、あたかも有用な科学的手段であるかのように利用されていった。

それから80年後、ガードナーは古典的価値観に挑戦すべく、人間の知的能力に関する新しい理論を提案した。Frames of Mind (1983)の中でガードナーは、IQテストは論理的、数学的能力や言語能力のみが有能な人間として必要な知能であるという価値観を土台にしたもので、このテストでは人間が持っているその他多くの能力を測ることはできない、と主張している。そして、総合的教育の現場ではこのようなテストによる能力の測定をやめ、一人一人の多種多様な能力を生かして学習能力を広げていくことを提唱し、おもに児童から高校生を対象に学校での新しい教育の方向性を推進しようとしている。

ガードナーのMI理論では、こうした多岐にわたる人間の潜在能力を大きく7つの分野にグループ分けすることによって、その存在と重要性を説いている。ここではこの7分野をガードナーの理論から簡単に紹介する。

3. 能力の7分野

言語能力 (Linguistic Intelligence)

言語の中核的操作における感性で、言葉の意味、音やリズム、語順、文法のきまり、そして言語の機能などがある。言語の知識が社会生活で重要とされる点として、(1) 言語を使って人に一連の行動を説明し納得させることができる、(2) 情報を記憶する道具として使うことができる、(3) 言語の役割として口頭による伝達と書かれた文字によるものがある、(4) 言語を体系として分析したり熟考する手段として使うことができる、などがあげられている。つまり言語は記号化されたコミュニケーションのかたちといえる。

論理的数学的能力 (Logical-Mathematical Intelligence)

ものごとを順序だてたり数量的検証をする分野で、論理的、数学的なパターンを理解する能力、情報を整理する能力、論証を組み立てる能力などがあげられている。この能力分野の最も中心的な特徴は、ものを長い根拠のつながりとして理路整然と考えることとしている。IQテストによって測ろうとした能力はこの分野に重点をおいたものであるが、これはあくまでも能力の1分野であり、すべてではない。

視覚空間的能力 (Spatial Intelligence)

視覚による情報を性格に認知する能力、最初の直覚から変換や修正をおこなう感性、そして視覚体験を想像によっていろいろな局面から再現する能力などが中心となる。同じ模様や形を識別できること、知的想像力がありその想像を変換できること、また空間的情報としてのデザインを創作したり活用したりできることなどがあげられている。この分野の能力は視覚による世界での個人の観察力と密接に結びついているが、必ずしも物理的視覚のみに頼るものではない。

身体的運動能力 (Bodily - Kinesthetic Intelligence)

この分野には大きく2つの特徴がある。ひとつは身体の動きを熟練した技でコントロールし、その身体をつかうことであり、もうひとつは指や手、体を使って物を器用に操作することである。前者では体全体をつかったスポーツをおこなうこともできれば、演技といった表現の手段とすることもできる。そして後者では、体の一部を正確にコントロールすることによってきめ細かな動きを創り出すことができる。身体をつかう活動が言語や論理をつかう活動に比べて価値が低いとみなされがちだが、近年の心理学の分野では、身体の使用と他の認知力との密接な結びつきが認められている。

音楽的能力 (Musical Intelligence)

音楽を構成する柱にはピッチもしくはメロディー、リズム、そして音質の3つがある。ピッチとリズムが音(サウンド)の中心となる要素であるのに対し、音質は音色(トーン)を特徴づける品質である。音楽的能力とは、ピッチやリズムや音質を創り出すこと、もしくは作曲家や指揮者、演奏家によって表現された音楽を鑑賞することといえる。こうした意味で音楽はコミュニケーションの機能をもったひとつのかたちといえることができる。

対人的能力 (Interpersonal Intelligence)

他人の気持ちや行動などを理解し、的確に反応する能力である。これには顔の表情、声、ジェスチャーなどによる非言語コミュニケーションの感性、個人個人によって異なる対人上の言動を見極める能力、またこうした言動に対して相互に作用し合う対応ができることなどが含まれている。

自己認識能力 (Intrapersonal Intelligence)

最後の分野は自己に対する認識、または自分の考えや行動に対する明察力である。さまざまなレベルでおこる自己の感情と向き合い、自己を知り、その認識から適応した行動をとることができる能力である。これには自己の内なる情緒、意志、動機、気性、また欲望を自覚すること、そして自己規律、自己理解、および自己尊重ができる能力が含まれている。前述の対人的能力と合せ、社会生活のなかで不可欠な知識であり、この2つの分野を除外しては他の知力の見解がすべて不完全なものとなってしまふ、とされている。

ガードナーはこの7つの分野へのグループわけについて次のような注意点をあげている。

(1) ここにあげた7つの機能は絶対的な分類ではない。更に付け加えることもひとつの分野を細かく分けることも可能である。つまり、人間の能力を解釈し分類する方法はほかにもいろいろあると考えられる。大切なことは能力の多様性を理解することである。

(2) すべての人が7つの分野の能力を潜在的にもっている。そしてそれぞれの分野で発揮する能力は人によって様々である。自分のもつ複数の能力を認知することによって人は多様なかたちでその能力を広げ、活用していくことができる。また、適切な指導や助力があればすべての人にこれら7分野の能力を開発することが可能である。

(3) それぞれの能力が単独で存在することは非常に稀である。つまり何かひとつの活動を行うとき、通常それぞれの能力は単独では働かない。複数の能力が相互に作用し合うことによってその活動を遂行する。

4. 理論から実践へ

今回の課題はこのガードナーの理論を日本語教育のなかでどう活用していけるか、ということである。私が教えているニューブランズウィック大学日本語クラスは目下のところ初級のみで、学習者の専門はエ

ン지니어リング、ビジネス、教育学などさまざまで、さらに一般の社会人も加わる。日本語を専攻したり語学を専門に勉強したい、という学習者はごく少数である。つまり、いわゆる語学的能力に特に優れているというわけではない学習者が、それぞれに興味や目的をもって参加しているわけである。こういった学習者が、そのストレスを軽減し継続した学習を推進していくために、自分の得意とする能力を使ってどんなアプローチができるか、また不得意とする分野の能力をどう開発していけるか、と考えたわけである。

Frames of Mindの発表以降、MI理論に対して教育の現場からも大きな反響があった。ガードナーはMultiple Intelligences: The Theory in Practice (1993) 他のかなかでこの理論に対して起こった様々な疑問や議論を取り上げている。より明快な分析が必要な部分もあるだろう。また、Carl Jungによる心理的傾向の分類やDavid Kolbによる学習スタイルの分類との関連性など、研究の尽きないテーマであろう。この理論を日本語のクラスに導入し活用するにあたって、ここではガードナーの根本的概念に賛同し、これに準拠することによって今回の課題にひとつの糸口を見つめるべく実践を試みた。したがってデータの分析にあたっては学習環境（クラス設定、人数等）や個人的背景（年齢、性別、国籍、既習言語等）など、学習効果に差異をもたらす可能性があるとみられる要因は比較の考慮からはずした。

ガードナーがMI理論を発表してから15年が経つ。この理論を取り入れているいろいろな教育の現場で学習指導を実践している先例は数多くみられる。Harvard Project Zeroはその研究グループの代表であり、Thomas Armstrong (1994)は現場の教師がどのようにMI理論を活用してクラス運営をしていけるかという、マニュアルともいえるものを書いている。David Lazear (1991)は7分野の能力を使って導入できる7通りの教え方および7通りの学習の仕方を紹介している。またP. Smagorinsky (1995)は語学のクラスでMI理論を実践し、Mary Ann Christison (1995)は第二言語の習得に理論の導入を提唱した。今回、日本語のクラスでデータを集めたりアクティビティーを選んだりするにあたっては、これらの研究者による図書を参考にした。

5. 実践の手順

まず、理論の導入を行った日本語クラスについて述べたい。

- クラスはいずれも夜間のクレジットコースである。週一回3時間もしくは週二回90分ずつで、1学期39時間の授業を行う。夏期集中コースでは週二回6時間となる。
- 授業はすべてひとりの教師によって行われ、テキストを含めた教材の選択や授業計画は同じ教師によって組まれる。
- コースは一年目の初級I、II、そして二年目の初級III、IVで合計2年間のプログラムがあるが、初級IVはまだ開講されていない。それぞれ4技能を習得することを目標としており、評価も筆記テスト、表記練習、ライティング、口頭、聴解クイズや口頭発表などに分割される。
- クラスの大きさは10名から35名まで幅があるが、平均15-25名である。
- 学習者の言語背景や国籍は様々である。全員が英語を媒介語として使用するが、フランス語、ドイツ語、北京語、広東語、マレー語などを第一、第二言語として話する者がさまざまにいる。アジア系留学生の出身地は中国、台湾、シンガポール、マレーシア、および香港などでクラス全体のおよそ3分の1を占める。
- フルタイムの学生が多数を占め、その専門はビジネス、エンジニアリング、教育学、政治、社会学、生物・物理学などさまざまである。またほとんどの場合、各クラスに社会人学生も含まれ、年齢層は18才から50代にまで広がる。男女の割合は、常に女子が少なめで、全体の3分の1から2分の1である。

それでは、実践の手順にしたがって説明をしていこう。

(1) 教師自身が得意・不得意を認知する。

学習者が教師の得意・不得意と似たものをもつ場合とそうでない場合とでは、学習のアプローチやクラスのアクティビティーにおいて発揮できる能力に差がでることは十分に考えられる。教師は自分の得意・不得意や、それに伴うティーチングの傾向を知ることによって、偏った教案にならないよう、検討の機会をもつことは大変貴重な点であろう。ここではアームストロング (1994) の An MI Inventory for Adults とクリスティソン (1995) の An MI Inventory for Teachers を使用して教師のMIを知る手がかりとした。

(2) クラスで実践することを学習者に説明する。

コースのはじめに教師が学習者一人一人の能力に注目し、持っている能力を生かして学習する方法をいっしょに探っていく姿勢を提示する。そしてガードナーのMI理論を紹介し、それぞれの分野の得意・不得意を知る手がかりとしてアンケートを導入すること、クラスでの学習活動を通してそれぞれの学習者と教師の双方がその学習者の得意を確認していくこと、そしてその得意を活用して不得意を克服するストラテジーを見い出す共同作業をしていくことを説明する。

(3) アンケートを使い、学習者に自分の得意・不得意を自己診断してもらう。

アンケートの作成にあたっては、クリスティソン (1995) の MI Check list for ESL Students を試験的に使い、クラスの学習者からの意見を取り入れて大学生および社会人のレベルにあったものに改定した (資料1)。またアンケート導入の際、これが個人の能力を決定づけるためのテストではなく、生活体験の中で獲得した得意を7分野の能力と結び付けることから始めるためのものだということや、チェックする項目の数がそれぞれの能力の程度を示すわけではないことなどを説明する。記入されたアンケートは教師が保持し、機会があるごとに参考にする。

(4) クラスでさまざまなアプローチやアクティビティーを導入し、学習者の観察をする。

授業計画を立てる際に、どんなアプローチで新しい学習項目を導入するか、どんなアクティビティーを使ってドリル練習やコミュニケーションのための実践練習が可能か、各能力分野に焦点をあててさまざまなアプローチやアクティビティーを盛り込む。それぞれのアプローチやアクティビティーには、中心になる能力分野およびそれに伴って使われるであろう能力分野が想定される。そして授業の中で学習者がどんな学習方法に能力を発揮しているか、またどんな苦手をみせているかを観察する。コースには筆記テスト、表記練習、ライティング、口頭・聴解クイズや口頭発表などがあるので、その結果もあわせて各学習者の得意・不得意を記録する。

(5) 学習者との話し合い。

コースが始まってから5週間目に最初のクラステストを行い、その直後に第一回目のインタビューを実施する。どんなアプローチやアクティビティーが好ましく、学習の助けになっているかを聞き、その得意な分野を記入済みのアンケートを合わせて教師と学習者の双方で確認する。また、苦手なアプローチやアクティビティーについても同様に確認し、学習者が自分の得意な分野の能力を活用して不得意な分野をより良くできるような学習方法を話し合う。

その後、クラス内外で学習者と話しをする機会に学習方法についてさらに質問やアドバイスを発展させていき、第2回目のインタビューをコースの終わりに行なう。ここでは、コースを通してどんな学習効果があったか、今後の学習にどう活用していけるかなどを話し合う。

こうして、学習者の得意・不得意はアンケート、観察記録、インタビューの3段階で確認していくわけだが、特にアンケートの自己診断だけでは必ずしも正確につかめないこともあり、これはむしろ学習者にMIの意識を高め、その後の2段階への参考資料のためと考えてよいだろう。クラスにおける観察は、も

っとも重要な部分となる。そしてインタビューでは学習者が自分に合った学習方法を見出す手助けをすることを目標とする。

7. 実践からの発見と考察

(1) 教師のMI

すべての能力分野の項目に少なくとも一つはチェックをしたものの、予想通り得意分野と不得意分野の傾向があらわれた。ある能力分野の中の各項目を読んだ時に日常生活で頻繁に実行していることや、自分の得意を言い当て、強く賛成できる項目の分野がある一方、チェックはしたもののそれ程強い傾向ではなかったり、苦手と思われることが多く含まれている分野がある。ちなみに私の場合、得意分野の傾向があらわれたのは視覚空間的能力と身体運動能力で、逆に不得意の傾向が強くあらわれたのは音楽的能力であった。また、ひとつの能力分野の中でどんなことが得意でどんなことが不得意かを知ることも興味深い。例えば論理的数学的能力の分野では、数学が好きだし問題の解決に論理的な理由づけを組み立てて結論を導くのが好きだが、科学の最先端で何が起きているか、殆ど無頓着に近く、機械やテクノロジーを駆使するのは苦手である。

こうして教師が自分の得意・不得意を念頭におくことによって、クラスでのアプローチやアクティビティーに得意なものばかりを取り入れないよう、自分が不得意なものを得意とする学習者の能力を潰してしまうことがないように心がけることが大切であろう。

(2) クラスの傾向

今回MI理論を実践したのは3クラスである。初級 1 からA（通常クラス、16名）、B（夏期集中クラス、18名）、初級IIからC（通常クラス、13名）を選んだ。アンケート、観察記録、インタビュアーの3段階にわたって個々の学習者と平行してクラスごとの傾向を調べた。各クラスでそれぞれに違った特徴や傾向があらわれた。たとえば、アンケートではAクラスで身体的運動能力や自己認識能力の分野に強い傾向がみられる一方、Bクラスではそれが論理的数学的能力や対人的能力の分野にみられる。クラス内ではAクラスは教師の説明を注意深く聞いて熱心にノートを取り、口頭練習では学習したことを忠実に従いながらジェスチャーを交えていたのに対し、Bクラスではしばしば質問が出てより広い枠の中で学習事項を理解しようとする傾向を示し、口頭練習では学習者同士の相互作用による活発なコミュニケーションが行われた。Cクラスの場合はA,B両クラスと違い、クラス全体の傾向が大きく二つに分かれていた。ひとつのグループはBクラスに近い特徴や傾向をあらわし、他方のグループはアクティビティーにおいても発話量が非常に少なく、個々にテキストやノートを使った自習になりがちだった。

こうしたそれぞれのクラスの特徴や傾向を把握しておく、どんなアプローチやアクティビティーを中心軸にしていくかを選択する際に参考になるであろう。つまり、同じレベルのコースでもクラスによって違った授業計画を立てることになる。そして、個々の学習者に焦点をあてて得意・不得意を考える時にも、その学習者の環境としてのクラスの特徴や傾向は考慮すべきであろう。

(3) 個人データからの発見

ここでは個々の学習者の記録から二例をあげて考察したい。なお、用いた名前は匿名である。

シェーン：アンケートからの予想

読書やライティングなど、文字による表現が日常生活に浸透している。

スポーツが好きである。

ジェスチャーやボディーランゲージをよく使う。

人と交渉するのが得意である。

クラスでの観察・評価

日本語の音声に興味を示し、発音練習に熱心である。

教師の説明をよく聞き、反応が表情豊かにあらわれる。

小グループのアクティビティーで、積極的に活動する。

数や時間の言い方の練習では、なかなかスムーズにできない。

語彙の習得が難しい。

語順や文の組立てがなかなか理解できない。

不得意な分野の学習は視覚教材からのアプローチでも余り効果がない。

最初のインタビューで、シェーンの得意を生かした勉強方法を話し合った。まず金額や時間の表現および語彙の定着のために、自分の興味のあること、そして自分にとって意味のある内容をトピックを選んでライティングの練習をおこなう。また、聴覚による学習が得意なのでテキスト用のテープを繰り返し聞き、反復することによって分の組立てや語彙の学習の助けになるようにする。そして、クラスでのグループやペアによる練習、スキットなどのアクティビティーを積極的におこなう。

一学期を通してのこれらの学習方法の効果として、提出課題の一つだったペンフレンドにあてる手紙で得意なライティングの力を発揮したことや聴覚による学習で学習意欲を維持したことである。一方、体を動かしたり人と協力して行うアクティビティーだが、語彙や文の組立ての理解に時間がかかるため、なかなか思うように活動できずいらしている様子がうかがわれた。ここでの発見は、得意な分野の能力を使うアクティビティーでも不得意な分野の能力を組み合わせる必要があると、その不得意が得意を妨げてしまう可能性である。このことから違ったアプローチで能力が生かせるさまざまなアクティビティーの導入が大切であるといえよう。また、視覚教材は教師である私自身が好んで使う傾向にあつて学習者からの反応もよいことから、ついすべての学習者にとって効果的な方法と思いがちであったが、シェーンの例はそれに頼ることの危険性を示唆した。

アダム：アンケートからの予想

文字に書かれたものをよく読んでいる。

あらゆる視覚的情報に敏感である。

論理的にものごとを分析するのが好きである。

自分自身の考え方やペースを大切にしている。

クラスでの観察・評価

日本語の表記に強い感心を示し、習得がはやい。

テキストやノートなど、書かれたものによる学習を好む。

問題や疑問を自分で解決しようとする傾向が強い。

口頭練習やクイズでは、聞き取りおよび発話に苦勞している。

小グループの活動でも他の学習者とほとんどコミュニケーションがない。

文の構造や文法のルールの運用面で困難がある。

この学習者の例から興味深いことがいくつかあった。まず、表記に対する関心とその習得の早さである。しかしこれは文字を覚えることによって日本語の本やマンガを読みたいとか、自分のライティングに役立てたいという動機とは結び付いていないように思われた。むしろ一つ一つの文字を正確に覚え、比較し、新しく学習した言葉を書くことに興味があり、漢字学習が自分でできる教材についての質問も受けた。通常日本語の学習者にとっては音声体系が先にあり、ひらがなやカタカナはその言語の音声を書き表す手段

として学習していく。しかしアダムの場合は表音記号をあたかもデザインと捉え、形や線をそのままイメージとして覚えてしまった可能性がある。そしてこれはアダムの優れた視覚空間的能力と関係があるのではないか、ということである。脳の機能でいえば言語をつかさどる左脳ではなく空間的知覚や音楽などの非言語能力の中核である右脳で学習したと考えられないだろうか。アダムとのインタビューの折り、日常生活において視覚を使ったアクティビティーのなかでも特に縦形や横線のパターンに親しんでいることがわかった。日本語の表記を言語的能力と離して学習する可能性としておもしろい。

又、アダムはアンケートの自己評価において論理的数学的能力の分野に強いという結果が出ていたが、言語の論理的な局面である文の構造や文法のルールの学習においてはその力が発揮されなかった。しかしこういった学習が嫌いだっただけではない。テキストの説明を読んで理解し、きちんとノートをとって整理をし、知識の引き出しに情報として整頓する。ところがこれを運用する場面できつと効果的に引き出しが開けられず、ライティングの提出物でも筆記テストでも間違いが多くみられた。またライティングにおいてひとつの長い関連づけによって文章を組み立てていくことにも不得意があらわれた。この一因として、ひとつの分野の能力のなかでも得意なものは人によってさまざまであるため、必ずしも言語学習の得意な局面と結び付けることはできない、といえるだろう。また、別の一因として対人的能力とのかかわりがあげられるかもしれない。ライティングや会話練習においてその目的を他人に自分のことを伝えたり人のことを知りたい、という対人関係のためのものと定義すれば、アダムのように人とのコミュニケーションよりも自分と向き合うことを好む学習者にはきちんとした文章による理解や伝達がそれ程重要に意味を持たないのかも知れない。特にアンケートの結果を100%鵜呑みにできないよい例であった。

さてアダムの得意を生かした勉強方法についてだが、前例のシエーンと比べてお判りいただけると思うが、アダムはクラスで大変静かな学習者だった。自分の興味のあることは先んじて学習する一方、言語をコミュニケーションの手段として運用していくための強化が必要だと思われた。そこでひらがなやカタカナの学習への関心が強いこと、イメージを視覚化する能力、そして書かれたものからの情報に得意な能力を使って、テキストやノートからドリル文型や対話モデルを書き出し、いろいろな場面を想定してこれらを書き換え、声を出して繰り返し練習することを勧めた。また、リスニングの練習として教師やクラスメート、テープの発話を聴く時に一つ一文を分析して考えるのではなく、全体の意味をつかむよう柱となる語彙の聞き取りに集中する試みを提案した。クラスのアクティビティーにおいても同じ傾向を持つ者やまったく違った得意を持つ者がいたので、さまざまなグループ分けやペアの組み合わせによる練習を促進した。

これまでの経験で自分の居心地の良い学習方法をとっていたアダムにとって、新しい試みは自分の垣根を取り払うようなチャレンジであったと思う。学期の終わりに行った口頭発表では、スピーチの内容を時間をかけて準備し、でき上がったものを繰り返し口頭で練習してよい発表となった。自分にとっても自信がもてたことと思う。

8. 実践の効用と難点

ここまで述べたことで、MI理論を導入しての日本語クラスの一方向性を紹介し、実践の例から考察を試みた。ここでその効用と難点についてまとめたい。

(1) 効用

- 教師が自分自信の得意・不得意を知ることにより、偏った教案にならないように検討の機会を持つことができる。また同時に、教師が学習者の得意を生かし不得意を開発する手助

けをするにあたり、教師のもつ得意・不得意がこれを左右する可能性にも気づくべきであろう。

- 学習者が自分の得意なアプローチを知ることによって、学習者に対する自信を持つことができる。そして語学もしくは語学のある分野の学習に自分にあった学習方法が使えることは学習に伴う苦痛の軽減に役立つ。
- 学習者が自分の得意な分野を開発し、学習方法を確立する可能性を認識することができる。そしてこのことは学習を継続する動機づけや学習目標の設定に役立つ。
- 学習者は教師が個々の学習者にとって効果的なアプローチを取り入れようと試みていることを知る。そしてこのことが一方的に教授するのではないクラスの学習方向を認識させ、教師および学習者間の相互作用を促進する。

(3) 難点

- 多様な能力に対応するアプローチやアクティビティーをクラスに取り入れていく必要性があり、教師は授業計画をする際に周到な準備をしなければならない。
- より人数の多いクラスで、果たして今回と同じ方法が可能だろうか。たとえばインタビューにしても多数の学習者の一人一人とゆっくり話しをするのは大変な作業になる。クラスでの観察やその記録も全体の授業の流れの中で行なうには他の教師またはアシスタントの協力が必要であろう。
- 学習時間やコースの期間が短い場合には、なかなか得意な分野を開発できない。今回の実践でも6週間の夏期集中コースでは、学習方法の確立にまでに至るのが難しかった。

9. まとめ

日本語教育にMI理論を活用していくには、これからより多くの実践を積み、開発していかなければならない課題である。40名ほどの大きなクラスをもった時のことである。学習者がさまざまなアプローチやアクティビティーを通して学習ができるよう工夫したものの、一人一人の能力の多様性に対するケアが十分ではなかった。二回目のクラス・テストの直後に一人の学習者が学習方法のアドバイスを求めてきた。テストの準備をきちんと行ったつもりだったのに問題の答えが書けなかったからだという。改めてガードナーの理論の大切さを痛感した。つまり、ガードナーは学習者の能力に関してクラス全体をひとまとまりと扱うのではなく、個人個人の違いに焦点をあて、教師がそれぞれの学習者に対して異なるアプローチを提供していくことを主張している。また、大きな課題の一つとして今後考えていくことに、こういった学習者の能力の多様性をどのように成績の評価基準に取り入れていくか、という問題である。今年度、一年間の初級 I、II コースを終了して初級 III コースに入った学習者に自分で学習課題を選ぶことができるセルフ・スタディー・プロジェクトを設ける試みを行った。成績の20%をこれにあて、一学期を通して学習に従事できるものを選ぶこととした。学習者は漢字学習、リスニング・ドリル、そしてライティングとその口頭発表などを行い、自分の得意を生かしたり、興味のあることを広げたり、また不得意を強化したりすることができた。

第二言語の習得にMI理論の導入を提唱したクリスティソン（1995）もESLのクラスで実践を行っているが、英語以外の言語学習についてはほとんど文献がない。ガードナーはそもそも学校児童のもつ能力に着眼してこのMI理論を打ち立てた。大学レベルの日本語教育に限らず、継承語としての日本語教育や社会人のためのクラスなどで広く実践を試みていただき、活発な話し合いによってより効果的な理論の活用ができるよう、皆様から忌憚のないご意見をうかがいたいと願っている。

参考文献：

- Armstrong, T. (1994). Multiple intelligences in the classroom. VA: The Association for supervision and Curriculum Developments.
- Christison, M.A. (1995). Multiple Intelligences and second Language Learners. Handout packet for participants at the TeleTESOL conference.
- Gardner, H. (1983). Frames of mind: the theory of multiple intelligences. New York: Basic Books
- Gardner, H. (1993). Multiple intelligences: The theory in practice. New York: BasicBooks
- Kreber, C. (1996). Understanding teacher learner interaction: Psychological type, teaching styles. The handout packet for participants of the workshop at St. Thomas University in Fredericton, NB.
- Lazear, D. (1991). Seven ways of teaching. USA: IRI/Skylight Publishing, Inc.
- MacKeracher, D. (1996). Learning from experience: Notes on Kolb's learning inventory. Course notes for methods and processes in adult education at UNB in Fredericton, NB.
- Smagorinsky, P. (1991). Expressions: Multiple intelligences in the English class. IL: National Council of Teachers of English.
- Springer, S. P. & Deutsch, G. (1985). Left brain, right brain (revised edition). New York: W. H. Freeman and Company.

資料 1 :

Questionnaire for Japanese Foreign Language Students

Name of students:

Directions: Put an "X" in the blank if the statement is true for you. Space has been provided at the end of each intelligence for you to write additional information not specifically referred to in the items.

Linguistic Intelligence

- I like to talk to my friends on the telephone.
- I spend a lot of time on reading in my spare time.
- I am a good writer.
- I like to tell jokes and stories.
- I can remember people's names easily.
- I enjoy word games such as word search and scrabble.
- Tongue twisters are fun to say to me.
- I enjoy reading poetry in my spare time.
- Learning vocabulary is easy for me.

Other Linguistic Strengths:

Logical-Mathematical Intelligence

- I enjoy playing games or solving brainteasers that require logical thinking.
- I am good at using computers.
- I am always curious to know how things work and I like to figure it out.
- I like or liked my math and/or science classes.
- I like to analyze phenomena and/or data.
- I sometimes think in clear, abstract, wordless, imageless concepts.
- I often do arithmetic in my head.
- I like to put things in categories.
- I am interested in new development in science.

Other Logical - Mathematical Strengths:

Spatial Intelligence

- I can generally find my way around unfamiliar territory.
- I often see clear visual images when I close my eyes.
- I am good at drawing.
- Geometry is easier for me than algebra.
- I enjoy doing jigsaw puzzles, mazes, and other visual puzzles.
- I loved to build things with LEGO building blocks.
- I prefer looking at reading materials that are heavily illustrated.
- I often draw small pictures on my notes during class.
- I enjoy art activities.

Other Special Strengths:

Bodily-Kinesthetic Intelligence

- It is hard for me to sit quietly for a long time.
- I am good at sports.
- I enjoy outdoor activities.
- It is easy for me to follow exactly what other people do.
- I am good at woodworking, building, or mechanics.
- I enjoy working on handcrafts.
- I need to touch things in order to learn more about them.
- I engage in at least one sport or physical activity on a regular basis.
- I frequently use hand gestures or other forms of body language when conversing with someone.

Other Bodily-Kinesthetic Strengths:

Musical Intelligence

- I can hum the tunes to many songs.
- I am a good singer.
- I play a musical instrument or sing in a choir.
- I can tell when music sounds off-key.
- I often tap rhythmically on the table or desk.
- I do not like loud noises.
- I unconsciously hum to myself.
- I often sing songs.
- I frequently listen to music.

Other Musical Strengths:

Interpersonal Intelligence

- I prefer group sports to solo sports.
- I enjoy talking to my friends.
- I consider myself a leader.
- When I have a problem, I am more likely to speak out someone for help than attempt to work it out on my own.
- I am a member of a committee.
- I like to participate in events or activities in the community.
- My friend often talk to me about their problems.
- I often call my friends and invite them to do things with me.
- It is easy for me to make new friends at a party.

Other Interpersonal Strengths:

Intrapersonal Intelligences

- I do not mind going to the movies alone.
- I keep a personal diary or journal.
- I can tell the things I am good at.

I can tell the things I am not good at.

I regularly spend time alone reflecting and thinking.

I prefer to work alone rather than in a group.

I often review what I said and/or did.

I sometimes find myself uneasy to be with new people.

I consider myself to be independent minded.

Other Intrapersonal Strengths